

童謡を読む まど・みちおの世界 — ぞうさん —

大野 恵美^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

保育現場で扱われている童謡は、明治・大正・昭和・平成と時代の流れの中で継承されながら、一つの文化としての位置付けを確実なものとしている。その童謡文化の中で最も親しまれ、口ずさまれてきた「まど・みちおの童謡」から「ぞうさん」を考察し、童謡詩の持つ重要な意義を提唱する。

【キーワード】

まど・みちお 童謡 表現

I、はじめに

まど・みちおは、104歳で天寿を全うするまで、膨大な詩や童謡を書き下ろしている。作品のすべては、とても分かり易い言葉の表現で綴られながら、世の中に存在するありとあらゆるものの「存在の不思議」が、作品創りのエネルギーとなっている。それは幼児が会うすべてのものに感嘆し、驚き、言葉となってこぼれ出る「心の叫び」が、発話となるように作品は生まれている。童謡は、子どもの心を育む大切な要素であることは言うまでもないが、大人の視点で童謡詩に触れてみると、置き忘れてきた感性や日本語の繊細な温かさを思い起こすことができる。保育の中で、童謡を歌う機会がほとんどないという現場や、養成課程においても童謡を学びとして共有する機会が少なくなっていることはとても残念である。本論では、代表作品「ぞうさん」を中心に詩の奥義を模

索しながら、幼児教育に継承されるべき言葉の大切さについて探求する。

II、略歴

まど・みちおは、1909年11月6日、山口県徳山市に生まれる。本名は、石田道雄である。窓が好きなことから、ペンネームを「まど」としたという由来がある。父は警察電話の整備工として、家族とともに台北に渡航した。まど・みちおは、徳山で祖父と二人で生活をするが、10歳の時に台湾に渡った。台北州立台北工業学校土木科に入学し、測量・設計・力学を学ぶ。この頃、詩の創作を始める。工業学校卒業後、台湾総督府に就職し道路・橋梁工事・測量・設計に携わる。22歳で受洗しクリスチャンとして数年間活動する。書店で目にした月間絵雑誌「コドモノクニ」が「童謡募集」をしていることを知り、五編の詩を投稿する。そ

のうち二編が北原白秋の推奨により特選となり、見開きの色刷りで発表された。「ランタナの籬」(11月号特選2)、「雨ふれば」(12月号特選1)である。このことがきっかけとなり子どものための童謡・詩に力を入れ始める。後にこのことが、童謡・子どもものへ主力を注がした大きな理由になったと記されている。1(「びわの実学校」97号1980年1月)

1941年、第二次世界大戦となり、33歳で応召し台南安平の船舶工兵隊に入隊する。以後、約3年半を東南アジアの前線で兵士として生活を送る。その間も日誌、短歌を書き続ける。敗戦後、1946年に帰還して、「チャイルドブック」(国民図書刊行会)の編集者として10年間務める。「保育ノート」「新児童文化」「幼児保育講座」「うたとリズム」「こどものくに名作編」「幼児げき」の刊行や教科書・スライド作成に携わる。「チャイルドブック」のカットも描いている。1951年(42歳)、短詩「スケッチブック」がサトウ・ハチロー選『世界の絵本 少年詩歌集』に収録され、6月に童謡『ぞうさん』が誕生する。翌年、團伊玖磨作曲によりNHKで初放送となる。1959年、国民図書刊行会を退職し、詩・童謡の創作に専念する。この頃、朝日放送のプロデューサーであった阪田寛夫に出会い、童謡・童話の仕事に依頼される。「幼児の指導」に連載した「三才児のための新しい歌」をまとめ、「ごはんをもぐもぐ おかあさんと子どものための歌曲集」(磯部 俣・曲 フレーベル館)として出版。それまでの童謡を集め「ぞうさん まど・みちおの歌100曲集」(フレーベル館)として出版。第11回サンケイ児童出版文化賞の推薦図書になる。

1968年、最初の詩集「てんぷらびりびり」を出版し、野間児童文芸賞を受賞。詩集出版にあたって、童謡集出版の依頼であったが、書き溜めていた詩が使えないことに気づき、半数を新しく創作

する。これが、後の詩作活動へのバネとなり、以降多くの詩が生まれる。『まめつぶのうた』『まど・みちお詩集全六巻』『風景詩集』『いいけしき』『しゃっくりうた』など次々に詩集が出版され、様々な賞を受賞。1994年(85歳)、IBBY(国際児童図書評議会)による日本人初となる国際アンデルセン賞作家賞を受賞する。その後、詩集『ぞうさんとくまさん』『まどさんの詩の本』『まど・みちお詩集』『メロンの時間』など次々に出版。100歳で『百歳日記』『どんな小さなものでも みつめると 宇宙につながっている 詩人まど・みちお100歳の言葉』(新潮社)を出版している。

Ⅲ、童謡観

まど・みちおの童謡試作のきっかけとなったのは、絵本雑誌「コドモノクニ」を見て、北原白秋・選「童謡募集」に作品を投稿したことから始まる。大正期の童謡興隆となる「赤い鳥運動」の流れは、芸術性の高い文化を子どもたちに伝えることを目指し、野口雨情・北原白秋・西城八十などにより童謡の精神性は高められ、それが昭和期の童謡へと引き継がれていく。まど・みちおの童謡は、昭和期の新たな幼児童謡を提示し、それまでの概念的に子どもを扱ったものから、より子どもの発育段階を視点におき幼児のための童謡が作られている。が、単に子どものための童謡としてくくることはできない。幼児という未分化の幼い発想からではなく、大人が持ち続けている童心を、理性的に言葉で表現することで年代を越えて作品に共感ができる世界観をうみだしている。その作品の根底に流れる想いとは何なのか…まど・みちおは、童謡について以下のように書いている。

童謡とは何だろう。この世の不思議は、自然の不思議、すべての存在と非存在、反

存在の不思議への叫びである。子どもという人間萌芽が、この不思議に直面して発した叫びである。凡ゆる人間の文化の歴史がそこから出発したところのその叫びそのものである。だからこの世に生きて何の不思議も感じる事のない大人に童謡を作る資格はないのだ。だから存在の不思議にうち震えていないような童謡は、童謡とはいえないのだ。童謡は存在の根源に迫ろうとするものではなくてはならない。そうでなければ童謡を詩として、われらが取り組む意味はなくなる。(ノート「へりくつ3」1969. 7.17)¹⁾

童謡には、ひとりの自分が創るのではなく、自分のなかのみんなが創るみたいな感じがあるのだろうか。詩を創るとき、この世でたったひとりの小さなひとつぶとしての存在が、身も世も非ず点を仰ぎみるようにしているところがある。どうして自分を自分であらしてくださったものへまっすぐに目を向けているところがある。童謡にはむろんそれはあるけれど、童謡の場合、そんなにせっぱつまってなくて、しかも自分をではなくて、私たちがという感じではないだろうか。自分のほかのみんながいくらかわいわいと、そんなに深刻ではなく、天を仰いでいるところがありはしないだろうか。(1981.11.15)²⁾

(^{1), 2)} まど・みちお「研究と資料」P42 谷悦子著)

まど・みちおの童謡の源は、「存在の不思議への叫び」であるとし、自分の中の普遍性のようなもの、誰でもが持っている集団的な世界を自分の中のみんなとして表現しているという。

谷川俊太郎は、まど・みちおの童謡について以下のように語っている。

子どもに受ける詩を書きたいという邪心や、邪念がほとんどなく子どもが喜ぶだろうという小細工もない。作為がなく一番深いところから自然に生まれてきている。工夫をしてしまうと言葉数が多くなるが、まどさんの詩はそれが極度に少なく、魂の中心にある確固としたものがあって、そこに近づくために実に単純な言葉になる。まどさんが信じる宇宙の仕組みのすばらしさが言葉で残ればいいというのが理想にある。基本的にまどさんは、自分を表現したいという詩人ではなく、短い言葉で世界を言いたいと思っているのではないか。(まど・みちお「研究と資料」P72 谷悦子著)

見えるものじゃなくてもすべて短い言葉で言い表したい。ひとつのリアルがあって、それそのものをわたしなりに表現したい。(「文藝別冊」まど・みちお P88 まど・みちお インタビュー 2000)

感じた事柄を感じたままに、的確に短い言葉で言い表す…これは幼児の発語の断片にも似た意味合いである。童謡は、子どもの心の世界を大人の視点ではなく、あくまでも子どもの視点で大きな宇宙を捉え、自然に言葉がこぼれ出て一つの童謡となって生まれている。「童謡は聞き手を前にしてのお話のようなもの」ともまど・みちおは言っているように、言葉の一つ一つが丁寧に、無理なく自然に伝わって沁みていく。

童謡は(まことに童謡は、児童への良き遊びの贈り物ともいえるものだから)純粹

な文学であってはならぬ。児童の求めに適合すべくやはり娯楽性が必要だと思う。唯そこには、芸術的叡智の操作が積極しなくてはならないのです。要するに娯楽的な文学でありたいのです。娯楽を扱ってゐるも娯楽ではない。文学である、というふうな作品です。(まど・みちお「研究と資料」P47 谷悦子著 昆虫列車 第九冊 1938年)

童謡は、子どもにとっての遊びであり娯楽性が大切としている。童謡の言葉はどの作品もユーモアに溢れ、一度耳にすれば自然に繰り返して歌いたくなる。そこには徹底した短い言葉での表現、そして大人目線では見落としてしまう、不思議を感じる子どもの目線や感性が存在する。何より見落としてはならない要素として、強要することのない芸術的思考が底辺に流れていることにある。

大正期の童謡興隆の時代に、今も歌われている童謡が存在する。しかし、この時代にあっては「芸術を子どもたちに」としているが、対象となる子どもは概念的に捉えられていた。昭和期の童謡では作品がより理性的になり、子どもの発達を考えて幼児のために童謡が作られるようになった。その確立を果たしたのが、まど・みちおの童謡と言って過言ではなく、さらに子どものために作品が生まれたようであっても、日本語としての「言葉の芸術」は、大人にも子どもにも通じる質の高い世界を追及している。

まど・みちおが記した直筆ノート「へそくり」のなかで、「童謡と詩」「童謡とわらべうた」について、谷悦子氏がインタビューをしている(まど・みちお「研究と資料」P230)。そこで語られた内容から、童謡に対する創作への重要な要素を窺い知ることができる。

作曲されて歌われることが前提になっている童謡では、美しいとか清らかだとかいった形容詞などの使用にそんなに神経質にならないで、ことばの流れの自然にまかせた方が結果的によいと思う。ごくごく自然に自分が子供になっていて「子ども体」のことばを並べだすようだ。これは、昔のわらべ唄の復活だとか、延長とかいう気持ちはないにしても、自分が日本人であって、そういう環境で育ち、意識しないでいても自然にその延長になっているかもしれない。童謡も歌うだけでなく読むことに耐えるものであって欲しい。それは曲に対しても新しさを促すのではないだろうか。童謡は、自分の中の日常一般性に目覚めた目が、その世界の素晴らしさを、大人こどもだれにでもわかりあえる「ツーカーことば」で書くのだと思う。言ってみれば童謡は、自分の中のみんなが書くのだと思う。(まど・みちお「研究と資料」P231～P233 谷悦子著)

童謡は言葉と音のメロディー、リズムが一体となり、共鳴し合い相乗効果で作品の世界を創り出す。あくまでも自然な言葉の流れには、自然な音楽が寄り添いイマジネーションの広がりは無制限で無理がない。童謡としての作品の多くは、短い言葉ゆえに奥行きと余白が存在し、単純で分かり易い「ひらがな」の表現力には、大人も子どももだれでもが口ずさめる、日本人としての言葉の味わいがある。究極的に厳選された言葉は、作品の質を芸術的領域に高め、年代や時代を越えて伝承され続けている。まど・みちおの童謡は、まさに伝承音楽としての域にある。

Ⅳ、童謡「ぞうさん」

日本人のなかで、「ぞうさん」を耳にしたことのある人はどの位いるだろう。実際に歌ったことのある人はどの位だろう。2, 3歳の幼児から100歳以上の高齢者まで、どこかで必ず口ずさんだことのある童謡。まさに日本を代表する“Traditional Song”である。多くの“Traditional Song”は、いつ、どこで、だれが創作したのかが不明のものが多い。しかし、「ぞうさん」は偉大な作詞家と作曲家によって生み出された秀逸の童謡である。年齢を越え、時を越え、いつの時代も人の心に優しさの種をまき続けた童謡である。

ぞうさん ぞうさん
おはなが ながいのね
そうよ
かあさんも ながいのよ

ぞうさん ぞうさん
だれが すきな
あのね
かあさんが すきなよ

ひらがなだけの8行という短い詩から、どのような映像が浮かんでくるだろうか。

例えば、誰かがちいさいぞうに「おはなが ながいのね…」と話しかけている情景があり、それに対してちいさいぞうが「そうよ かあさんも ながいのよ」と答える。人間の子どもが、動物園の柵を挟んでぞうのこどもと話しているシーン、又は他の生き物や自然との会話…等々、様々な情景が浮かんでくる。

童謡は、当然歌うことを前提に作られるが、詩が伝えたいことを知ることはとても重要である。

まずは「ことば」を読むこと、そこから広がる映像を感じる事が大切である。声を出して詩を読む…というだけではなく、詩の前、または後にあるだろうストーリーを感じることができれば、言葉の奥行きは無限に存在する。

「ぞうさん」の場合、ぞうのこどもと話している対象が、例えば人間のこどもだと設定してみると、「初めてぞうに会う日」の出来事として、いくつものイメージが湧いてくる。

「ぞうに会うことが目的で動物園にでかけるこども」

「動物園にでかける準備、持ち物、etc」

「動物園への乗り物・景色」

「動物園の入り口から様々な動物の動き、鳴き声、etc」

「ぞうを見つけ、柵まで走るこども」

「柵につかまりぞうに呼びかけるこどもの様子」

前提として創造できる場面が、コマとして浮かび上がる。

小さなコマをつなぎ合わせ「ぞうさん」の詩にいきつくと、「詩」には記されていない、ぞうに会いたかったこどもの気持ちまで描くことができるのである。

究極的にシンプルで言葉数の少ない「詩」だからこそ、余白があり読み手は余白を自由に演出し楽しむことになる。

「ぞうさん」の作曲者である團伊玖磨は、この余白や奥行きをしっかりと捉え、映像としてのイメージを、旋律で表現し名曲が誕生した。

前奏である冒頭の二小節、右手の動きは、「ぞうが鼻を揺らしながら、ゆったりと歩いている」そのようなイメージを音から知ることができる。歩みのステップを拍子で表現するとした場合は、2拍子になることが多いが、ここでは3拍子で作

曲されている。その意図は、ぞうの足の動きの合間に鼻を揺らしている動作が加わり、ゆったりとしたより優雅なぞうの動きを表したものと解釈される。歌の伴奏についてみると、初めの4小節「問い」の部分は、右手に歌のメロディーがそのまま進行し、左手は3度の重音で「問い」に耳を傾けるがごとく静かにメロディーを支えている。映像的には小さなぞうが、小刻みに足踏みをしている感じが感じられる。ぞうの「答え」となる後半の4小節は、ぞうの気持ちをしっかりと伝える後押しをするように、伴奏の音域に幅を持たせ、ぞうの鼻が大きく揺れる様子を感じとることができる。

歌の旋律は、ぞうさんの詩の要素である会話的なごく自然の流れが、言葉に沿って無理のない音の進行を作り上げ、シンプルで心に残る短い旋律が、歌うことを易しくし年代を越え歌い継がれてきた。8小節の旋律は日本中に広がり、今なお現役の童謡として存在する。(楽譜：ぞうさん参照)

童謡はどんな受けとりかたをされてもいいのだが、その歌がうけとってもらいたがっているようにうけとってほしい…と談話にある。この「ぞうさん」について、阪田寛夫がまど・みちおに作品の真意について問い、語られた内容は以下のようなものである。

たぶんこういう風にうけとってもらいたがってる、というのはあります。

詩人の吉野弘さんの解釈が、それに一番近かった。吉野さんは、「お鼻がながいのね」を悪口としていっているように解釈されています。

私のはもっと積極的で、ゾウがそれを「わるくち」と受け取るのが当然、という考えです。

もし世界のゾウがたったひとりだけで、お前は片輪だといわれたらしょげたでしょう。

でも一番好きなかあさんもながいのよと誇りを持って言えるのは、ゾウがゾウとして生かされていることがすばらしいと思っているから。

自分が自分としてうまれていてすばらしい、ということテーマにしている詩が、自分の作品には多いと語られたとある。(「まどさん」阪田寛夫 P27～P29)

生きているものすべてに慈しみを持ち、身の周りのすべてに感謝を感じ、作品は生まれてきた。言葉表現の底辺に流れている作者のポリシーは、そのまままど・みちおのありのままに生かされているという考えを映し出しているのではないだろうか。作者は22歳の頃、台湾ホーリネス教会で洗礼を受け、しばらく教会に通っていた。この精神が、作品に直接つながるものではないかもしれない。が、生きるために必要な気づきが、作品には秘められている。ひらがなだけの小さな言葉の世界は、壮大なメッセージを持って奥行きのある創造的な世界へと広がる。

<楽譜：ぞうさん>

園 伊玖磨 作曲



(日本音楽著作権協会(出)許諾第 1801836-801)

V、まとめ

まど・みちおの「童謡」作品の創作には、時代背景が大きく関わっている。1945年以降、敗戦後の復興のなかで教育制度が大きく変化し、幼児教育を充実させる流れと勢いが増していった。ラジオ放送に子ども向けの番組ができ、電波を通して童謡は日本中に広がった。娯楽番組や情報の多くが、ラジオからの音声によって伝わり、昭和期の童謡ブームが到来した。出版物では、子供向けの雑誌だけでなく、保育者向けの教材としての雑誌が次々と刊行された。

童謡「ぞうさん」が、NHKで初放送されたのは1951年。まど・みちお42歳の時である。20代前半から詩作を始め、職を転々としながらも作品を発表し、保育教材の編集に携わっていた頃に名作は誕生した。自身の子どもを動物園に連れて行った時、檻の中にはいないゾウを子どもに伝えるために作られた等々、作品誕生には諸説ある。しかし、どのような状況でどのようにして作品が生まれたかについて、まど・みちおは記憶していなかった。少なくとも身近に幼少の子どもがおり、幼児や保育に関わる出版の仕事に携わっていたことは、子どもたちに優しい言葉で、分かり易く、個々の存在のすばらしさを伝えたい…という想いがあったことは間違いない。

端的で言葉が自由に遊ぶような表現から生まれた童謡は、子どもに向けたという時空を超えて、年代を問わず一人一人の人生に沁み込んでいった。大正期にあった、児童文化を高める運動の精神を少なからず継承し、その精神を礎に、理性的でなお且つユーモアに富んだ発想から生み出された童謡は、60数年の時を刻み続け、人の心の癒しとして生きている。

耳から創造する音声の時代から、視覚的なテレ

ビの時代へ移り、子ども向けの番組は幼児の成長に大きく影響するようになった。教育的な子供向けの番組から童謡は次々と発信され、家庭だけでなく保育の現場へも広がっていった。

視覚を重視した童謡は、動きのあるものや映像の美しさが重視され、言葉がすべてであった感性が乏しくなり、童謡だからこそ伝えられる、日本語の美しい表現や味わいが薄れていったように思われる。日本語の形態も時代とともに変化し、短縮した言葉の表現や新しい言葉が煩雑に存る。子どもの成長に深く関わる保育の仕事のなかで、何を子どもたちに伝えていくべきなのか…専門的なスキルを向上させるとともに、保育者自身が感性を磨くこと、より豊かな心の余白を持つことで、日々の保育が高められることは間違いない。

まど・みちおの童謡を、歌うだけでなく声に出して読んでみると、保育を豊かに展開するための、沢山のヒントが隠れていることに気づくだろう。まずは「言葉からのイメージを持つこと」がとても大切である。歌うだけの童謡から、読む童謡を知ることによって豊かな保育を目指し、子どもたちに与える日本語としての言葉が、美しいものであることを願いたい。

<まど・みちお年譜>

1909年（明治42年）

本名・石田 道夫。11月16日、山口県徳山市に生まれる。父は、郵便配達、電話線敷設工事に従事、後に技術を習得し台北州の警察電話責任者となる。

1915年（大正4年）6歳

母、兄、妹は台湾の父のもとへ渡る。徳山で祖父と2人だけの生活が始まる。

1919年（大正8年）10歳

徳山町立岐陽尋常高等小学校を3年生で退学し、台湾の両親のもとへ渡る。4月台湾私立城南小学校4年生に転入。

1922年（大正12年）13歳

台北第1中学校を受験するが失敗し、台北末広高等小学校に入学。

1924年（大正13年）15歳

台北州立台北工業学校土木科入学。測量・設計・諸力学・施工などを学ぶ。

8月、祖父死去。享年78歳。

1928年（昭和3年）19歳

父の榮転に伴い、新竹州桃園街に転居。この頃、謄写刷りの同人誌「あゆみ」をはじめ、詩を発表する。自らカットも描く。

1929年（昭和4年）20歳

台北工業学校土木科を卒業。台湾総督府道路港湾課に就職し、以後8年間、道路、橋梁、暗礁工事の測量・設計・施工に関わる。この頃、詩誌「詩神」に掲載された尾形亀之助の詩に接する。

1931年（昭和6年）22歳

台北ホーリネス協会で洗礼を受ける。

1934年（昭和9年）25歳

絵本雑誌「コドモノクニ」（東京社）を見て、北原白秋・選の「童謡募集」を知り、五編を試作投稿。うち「ランタナの籬」「雨ふれば」の二編が特選となる。これがきっかけとなり子どものための詩・童謡の創作に力を入れはじめる。

1935年（昭和10年）26歳

「コドモノクニ」「子供の詩・研究」「童謡時代」「童

魚」「動物文化」などに投稿。以後数年間、様々な雑誌・新聞などに投稿を続ける。

1935年（昭和11年）27歳

雑誌「桑の実」に投稿した童謡「ふたあつ」が知らぬまに作曲され、キングレコードより発売され大ヒットとなる。

1937年（昭和12年）28歳

投稿仲間の水上不二のよびかけで、真田亀久代ら数人と同人誌「昆虫列車」を創刊。

1938年（昭和13年）29歳

母校の台北工業学校で教職につく。秋、台北州庁土木課へ再就職。

1939年（昭和14年）30歳

永山寿美と出会い、台北聖教会で結婚式を挙げる。秋、創立された台湾詩人協会に参加。

1940年（昭和40年）31歳

1月の創刊された「文芸台湾」に詩・童謡・散文詩を発表。9月、長男が生まれる。

1943年（昭和18年）34歳

台南安平の船舶工兵隊に入隊。マニラ、シンガポール、ジャカルタ、スラバヤ、マサツカル、アンボイナを移動し、最後にアルー諸島へ移る。日誌だけは書き続ける。

1945年（昭和20年）36歳

8月15日敗戦。日誌と「植物記」は英国軍の接収に先立ち焼却させられる。

1946年（昭和21年）37歳

収容所から広島県大竹港に帰還。故郷徳山に帰る。

4月両親も台湾から徳山に戻る。7月、妻子のいる大阪へ行き、9月、単身で川崎に行き味の素川崎工場の守衛として働く。

1946年(昭和22年)38歳

家族で川崎市に移る。ノートに短詩をメモ風書き留める。次男が誕生。

1948年(昭和23年)39歳

与田準一の呼びかけで、味の素を退社し、婦人画報社に入社する。詩・短詩を書き始め、童謡を幼児雑誌、ラジオ放送などで発表。

1946年(昭和24年)40歳

「コドモノクニ」を「チャイルドブック」と誌名変更し創刊。国民図書刊行会の発行となり、10年間社員として編集に携わる。「保育ノート」「新児童文化」「幼児保育講座」「うたとリズム」「こどものくに名作選」「幼児げき」の刊行や、教科書・スライド作成などに携わる。

この仕事で、武者小路実篤、丸木俊、土門拳、田村茂、小川未明、佐藤義美らと出会う。また「チャイルドブック」のカットを描く。

1951年(昭和26年)42歳

短詩「スケッチブック」がサトウ・ハチロー選「世界の絵本 少年詩歌集」に収録。6月童謡「ぞうさん」を書く。翌年、団伊玖磨作曲でNHKにて初放送。

1954年(昭和29年)45歳

聖歌編『日本児童文庫43 日本童謡集』に童謡七編が収録。

1959年(昭和34年)50歳

国民図書刊行会を退社し、詩・童謡の創作に専念

する。この頃、坂田博夫に初めて出会い、童謡と童話の仕事に依頼される。

1960年(昭和35年)51歳

「幼児の指導」10月号より『三歳児のための新しい歌』の連載を始める。

1963年(昭和38年)54歳

発表してきた童謡を集め、『ぞうさん、まど・みちお子どもの歌100曲集』として出版。

1968年(昭和43年)59歳

第一詩集『てんぷらぴりぴり』を出版。第六回野間児童文芸賞を受賞。

1974年(昭和49年)65歳

10月『まど・みちお詩集全六巻』の刊行を開始。11月『ぞうさん』を国土社の詩の本、七巻として刊行。季刊『ひろば』の連載を開始。

1976年(昭和51年)67歳

4月『植物のうた』で第16回日本児童文学者協会賞を受賞。5月『まど・みちお詩集全六巻』で第23回サンケイ児童出版文化省を受賞。7月『ぞうさん』で赤い鳥文学賞特別賞を受賞。11月川崎市文化省を受賞。

1977年(昭和52年)68歳

『童話』に詩の連載を開始。

1978年(昭和53年)69歳

「毎日こどもしんぶん」に、谷川俊太郎と隔週で詩の連載を開始。

1979年(昭和54年)70歳

『ぞうさん』『つけもののおもしろ』『風景詩集』を

出版。第22回厚生省児童福祉文化奨励賞を受賞。

1980年(昭和55年)71歳

第23回日本児童文芸家協会児童文化功労賞を受賞。

1981年(昭和58年)72歳

第4回巖谷小波文芸賞を受賞

1985年(昭和60年)76歳

第1回ダイエー童謡大賞を受賞

1986年(昭和61年)77歳

第35回小学館文学賞を受賞

1989年(昭和64年)80歳

詩集『くまさん』を出版。演劇集団・円が「まど・みちおのまど」を上演。

1990年(平成2年)81歳

すばる劇場「まど・みちおの世界」を放映(NHKテレビ)。

徳山市に「ぞうさん」の詩碑が完成

1992年(平成4年)83歳

全詩集を集めた『まど・みちお全詩集』を出版。美智子選・訳『THE ANIMALS』を日米同時出版。徳山市より市民文化栄誉賞を受ける。

1993年(平成5年)84歳

NHK教育テレビ<土曜フォーラム>で「『ぞうさん』のメッセージ、詩人まど・みちおの世界」を放映。『まど・みちお詩集』で第43回芸術選奨文部大臣賞を受賞。第40回サンケイ児童出版文化省大賞を受賞。

1994年(平成6年)85歳

『まどさんの詩の本』の刊行開始。『まど・みちお全詩集』で第16回路傍の石文学賞特別賞を受賞。日本人初の作家賞となる国際アンデルセン賞受賞。

1995年(平成7年)86歳

「詩人まど・みちお 宇宙をみつめて」が再編集され、NHKにて再放送される。新版『ぞうさん・まど・みちお子どものうた102曲集』(フレール)を出版。

テレビ朝日「徹子の部屋」に出演。徳山市文化会館にて「まど・みちお絵画展」が開催される。詩集『ぞうさん・くまさん』(岩波書店)出版。

1996年(平成8年)87歳

うたのえほん『1ねんせいになったら』(理論社)出版。「まどさんの詩の本」第2集を刊行。朝日新聞社主催「まど・みちおの世界」展が開催。全国12か所で開催される。『まどさんの詩の本』の続刊、『かんがえる』『地球ばんざい』『かがやけ木と草』を出版。詩の絵本『たんぽぽヘリコプター』(小峰書院)出版。

1997年(平成9年)88歳

『まどさんの詩の本』第3集を出版(全15冊完結)。『だじゃれはだれじゃ=まどさんとさかたさんのことばあそびⅡ』(小峰書院)を出版。新装版『まめつぶのうた』を出版。

1998年(平成10年)89歳

ハルキ文庫『まど・みちお詩集』を(角川春樹事務所)を出版。まど・みちお詩のえほん2『きりんさん』(小峰書院)を出版。第47回神奈川文化賞を受賞。

1999年（平成11年）90歳

1998年度朝日賞を受賞。詩集『メロンのじかん』（理論社）を出版。岐阜県美術間で『「在る」ということの不思議＝佐藤慶次郎とまど・みちお展』を開催。

2000年（平成12年）91歳

詩集『おなかの大きな小母さん』（大日本図書）を出版。『ひまへまごころあわせまどさんとさかたさんのことばあそびⅢ』（小峰書院）を出版。

2002年（平成14年）93歳

詩集「うめぼしリモコン」（理論社）で丸山豊記念現代詩集を受賞。

2003年（平成15年）94歳

日本芸術院賞受賞。画集「とおいところ」（新潮社）出版。

2009年（平成21年）100歳

百歳を記念し「まど・みちお え てん—ある詩人の100年の軌跡、童謡・抽象画・詩—」開催（周南市 翌年、川崎ミュージアムで開催）

新作詩集「のぼりくだりの」（理論社）「逃げの一手」（小学館）を出版。

絵本「せんねんまんねん」（理論社）が産経児童出版文化賞美術賞を受賞。

2010年（平成22年）101歳

「百歳日記」（NHK出版）出版。「どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている 詩人まど・みちお 100歳の言葉」（新潮社）出版。

2013年（平成25年）享年104歳 2月28日老衰のため没す。

（「まど・みちおの詩集」ハルキ文庫、「文藝別冊」まど・みちお 河出書房新社、「百歳日記」NHK

出版）

参考・引用文献：

- 1、[文藝別冊]まど・みちお 河出書房新社
- 2、いわずにおれない まど・みちお著 集英社
- 3、まど・みちお詩集 まど・みちお著 ハルキ文庫
- 4、まどさん 阪田寛夫著 ちくま書房
- 5、まどさんのうた 阪田寛夫著 童話屋
- 6、まど・みちお「資料と研究」 谷悦子著 和泉書院
- 7、<ぞうさん> まど・みちお 子どもの歌100曲集 フレーベル館
- 8、百歳日記 まど・みちお著 NHK出版
- 9、どんな小さなものでもみつめていると 宇宙につながっている まど・みちお著 新潮社

A children's song is read Mado Michio's World
- Elephant -

Megumi OHNO

【abstract】

Children's song handled at nursery schools are inherited in the era of Meiji, Taisho, Showa, Heisei. It exists as a culture. In this paper, I will consider "Elephant" from Mado Michio nursery rhymes, which has been most popular and sung among its children's song culture. I advocate important significance of children's song poetry.

【key words】

Mado Michio, A Children's song, Expression